



好きって言わせ



て

芳田尚哉

はじめに

この作品は、執筆途中です。順次増えていきます。

とある場所での寸劇が発端となっております。

完成しないかもしれません。（笑）

とある場所の方々へ。

コメントでいただければ、新キャラとか、追加設定があれば反映します。そりゃもう、ライブで寸劇できる程度にはしてみます。

告白

「こんな場所に呼び出して、どうしたんだよ」

竹乃森竜也は、手紙をひらひらさせながら、グラウンド裏にあるテニスコートにやってきた。

「ごめんね、急に」

彼を待っていた玉川多麻美は、うつむきながら、手をもじもじさせて答える。

「いや、別にいいんだけどさ」

竜也は手紙と多麻美を見比べる。

手紙には、ここに来て欲しいとだけ書かれていて、用件が全くわからない。

いくら思い返しても、呼び出される心当たりがない。

まさか待ち伏せ……なんて事も考えたが、現実としてそれはないだろう。

だったら、なおさらわからない。

「でさ、なんの用かな？」

わからないなら訊けばいい。悩んでいてもしょうがない。率直に訊く事にした。

「あ、あのね……」

多麻美はまっすぐに竜也を見れず、ただうつむいていた。

早く言わなくちゃ、という気持ちだけが先走るが、上手く声に出せなかった。

言わなきゃ、言わなきゃ——それだけがリフレインする。

「それにしても、ここって滅多に来ないからな……」

「あ、あのね——」

二人の声が重なる。

必死に絞り出した言葉だったが、それ以上続かなかった。

「あ、悪い。なに？」

「え、えっと……」

振り絞った勇気を使い果たしてしまった多麻美は、一度深呼吸をする。

よし言うぞ、と自分に言い聞かせる。

「あのね。私、竹乃森君の事が好きです」

多麻美は顔を真っ赤にして、竜也を見る。

「えっ？ お、俺？ えっ？」

突然の告白に戸惑い、上手く言葉が出ない。

「嘘っ」

そんな竜也とは別の場所から、そんな声が聞こえた。

「麗子？」

声がした方を見た多麻美は、そこに親友の雑木林麗子を見つけた。

「あ、あの……竜也がこっちに来たから、なにかな……って、その……ごめん」

麗子はそれだけ言って、校舎に方に走っていった。

「あいつ、なにしてんだよ。悪い、ちょっと追いかけるわ」

そう言うと、竜也は麗子を追いかける。

「……………」

多麻美は、その姿をただ見ているしかできなかった。

「行っちゃった……。やっぱり、竹乃森君は麗子の事……」

「あれ、どういう事？ 多麻美が竜也に告白？ えっ？ そうだったの？」

麗子は、頭の中がぐちゃぐちゃになっていた。

特に目的地がないまま、ひたすら走る。走りながら、なんとかまとめようとしても、今見た光景がリフレインしてしまう。

「おい、どうしたんだよ」

追いついた竜也が、麗子の腕を掴む。

「ちょ、離してよ」

それをふりほどこうとするが、逃げる事ができない。諦めて、校舎の壁に手をつけて、呼吸を整える。

「どうしたんだよ、お前」

「なんで竜也がここにいるわけ？ 多麻美に告白されてたんでしょ。一緒にいなくていいの？」

麗子はそっぽ向いて言い放つ。

「それは……。でも、お前が走っていったから」

「はあ？ それがどうしたのよ。幼なじみが走っていったら、あんたは追いかけるわけ？」

「それは……。俺だって、よくわかんねえんだよ。お前が走っていったのを見たら、追いかけるなきゃって思ったんだよ」

「なに、それ。わけわかんない」

「俺だってそうだよ」

竜也は壁に手をつく。

「ちょ、なに……」

麗子は自分の顔の横にある竜也の手に視線を向ける。

「わかんねえけど、追いかけたかったんだよ。悪いかよ」

「悪いわよ。わたしは、別にあんたの事が好きとか、そういうんじゃないんだから」

「そうだけど……」

「ほら、あんたは多麻美のところに戻らなきゃ」

麗子は竜也の体を押して、ゆっくりと離れていく。

「あんたに告白してくれるなんて、なかなかあるものじゃないわよ。多麻美はすごくいい子だし、よかったじゃない」

「麗子？」

「ほら、行った行った。もう追いかけてこないでよね」

そう言って、麗子はゆっくりと歩き出す。

竜也は、その後ろ姿を見つめていた。

校舎の角を曲がると、麗子は小走りで駆け出す。

心臓が跳ねる。

「わたし、どうしちゃったんだろう？ あれ？」

麗子は自分の異変に気付いて立ち止まる。

顔に手を当てると濡れていた。

「あれ？ どうして涙なんて出るんだろう？」

麗子は校舎の壁に背中を預けた。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

登校

「おはよう、多麻美」

「おはよう、麗子」

教室に入ってきた麗子は、いつものように親友と挨拶を交わす。

「おはよう、麗子」

「おはよう」

他のクラスメイトにも挨拶をして、自分の席に座る。

「おはよう、麗子」

「おはよう」

多麻美はその前の自分の席に後ろ向きに座って、改めて挨拶をする。

「うわぁ～ねむっ」

麗子は机に突っ伏す。

「あんた、いっつもそれね。ちゃんと寝てる？」

「寝て……るはず。っていうかさ、夜ってテンション上がるじゃない？ 寝れる？ むしろ、それを訊きたいね」

「あんたね、なにわけわかんない事……って、わかる。めっちゃわかる」

「でしょ～。つうわけで、おやすみ～」

「って、寝るな。起きなさい」

「うう～、多麻美は厳しいよ」

「厳しくない」

「おはよう、麗子、玉川さん」

「おやすみ、竜也」

「あっ……おはよう、竹乃森君」

竜也は多麻美の隣の席に座る。

「……って、寝るのかよ」

一瞬の間があって、竜也はツッコむ。

「遅い。だから寝る」

「いやいや、寝るなよ」

などと、恒例のグダグダトークを、うらやましそうに多麻美は見ている。いつかは、自分も自然とその輪に入りたいな……と思いながらも、なかなか入っていけない。

「玉川さんも、毎朝これの相手なんて大変だよな」

「えっ、あ、ううん、そんな事ないよ」

突然話しかけられた多麻美は、驚いて言葉を詰まらせる。

「本当か？ 一瞬考えただろ」

「そんな事ないよ」

「まあ、そういう事にしておくか」

そう言いながら、竜也は授業の準備を始める。
毎度ながら、麗子は授業が始まる直前まで寝ていた。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「よし、今日も頑張った」

放課後になり、麗子は元気いっぱいに立ち上がる。

「なにが頑張ったよ」

「確かに頑張ってたな。寝るのをさ」

二人にツッコまれても、睡眠をとって元気いっぱいの麗子は、全く気にしていない。それどころか、眠ったおかげで、パワー充電。完全回復だ。

「さあ、これからが本番よ」

そう言いながら教室を出て行く麗子に、たまたま通りかかった担任教師は、ほどほどにね……と声をかけていく。

「ほどほどに楽しみます」

ズビッと敬礼をして返す。

「玉川さん、雑木林さんのお守りをよろしくね。あまり、羽目を外さないようにね」

「……頑張ってみます」

「大変だな、玉川は。俺は帰るわ。じゃあな」

竜也は鞆を肩にかけて教室を出て行く。

「ばいばい。わたしは、多麻美と楽しむからね」

「はいはい、うらやましいうらやましい」

「棒読みムカツク」

ケラケラと笑いながら、手を振って廊下に消えた。

「ったく……。で、今日はどこ行く？」

多麻美は竜也の姿を追いながら、小さくため息を吐く。

「ん？ どうしたの？」

「あ、ううん、なんでもない」

「そう？ ならいいけど。今日はそうだな……カラオケでも行く？」

「うん、いいよ」

「今日は、新しい仲間を紹介します」

いつも通りの朝、いつも通りに過ぎると誰もが思っていた。

教室にいた全員が、その言葉に驚き、ざわざわと話し始める。

「入ってきて」

担任が廊下に向かって言うと、髪の高い美少女が教室に入ってきた。

「うわっ、なにあの美少女」

麗子は思わず心の中の声をお口にします。

男子は全員が、その姿に釘付けになっていた。普通なら、それを見ていた女子が、イヤミのひとつでも言うのだろうが、完全にみとれてしまっていて、そういう気持ちがない。それというのも、彼女の雰囲気がとてもやわらかく、イヤな気持ちを感じさせない。

「****（名前未設定）です。よろしくお願いします」

か細い声で挨拶をして頭を下げると、ふあざと髪が顔を覆う。

それがとても美しく、教室中がどよめく。

「なんだ、あの完璧美少女は」

「ちょっと、麗子。声、出てるよ」

「あ、ごめん」

多麻美に注意されて初めて気付く。

しかし、誰もが思っている事だったので、誰も麗子の言葉を気にしていなかった。

「じゃあ、**さんはあそこね」

「はい」

涼やかな声で答え、ゆっくりと廊下側の一番後ろの席に向かう。

静かに座ると、さっそく隣や前から声をかけられており、少し戸惑っているのを見て、麗子はニヤニヤしていた。

「綺麗だな……」

彼女の容姿もだが、そのシチュエーションがうらやましく、憧れてもいた。

「転校生か……。いいなあ」

「バカだ。バカがここにいる」

「麗子ってば……」

竜也と多麻美は、そんな麗子を見て、肩をすくめるのだった。

**の事は、同じ学年にはその日の朝には、情報が行き渡っていた。この勢いだ、放課後までには、学校中に知れ渡っているだろう。

突然の美少女転校生。

話題にならないはずがなかった。

休み時間には、廊下が人でいっぱいになった。

当人は笑顔で対応していたが、むしろ麗子たち他のクラスメイトが、この状況に驚いていた。

「なに、あれ。異常でしょ」

「麗子の頭くらい異常だな」

「うんうん……って、違う。わたしは正常」

大きくうなずいて、一度は本当に納得しそうになってしまった。

「玉川さん、ちゃんと教えてあげてよ」

「えっ？ 私？ えっと……麗子は大丈夫だよ」

「玉川さん、そんなお世辞はいって。本当の事を教えてあげないと」

「竜也、あんた失礼すぎ。そりゃ、**さんほどじゃないわよ。それは自覚してる」

「なあ、それって言っててムナシくないか？」

「言わないで。今、自分で言って、悲しくなってるんだから」

「バカが自滅した」

多麻美がため息を吐きながら、毎度毎度のやり取りを見ていると、ふと視線を感じた。

ん？ とその方向を見ると、一瞬だけ**と目が合った。

しかし、すぐに視線をそらされてしまう。

多麻美は、どうしたんだろうと首を傾げるが、みんなからの質問に笑顔で答えている**を見ても、なにもわからなかった。

「偶然だったのかな」

そう思い、それ以上は考えない事にした。

好きって言わせて

<http://p.booklog.jp/book/76989>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76989>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76989>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ